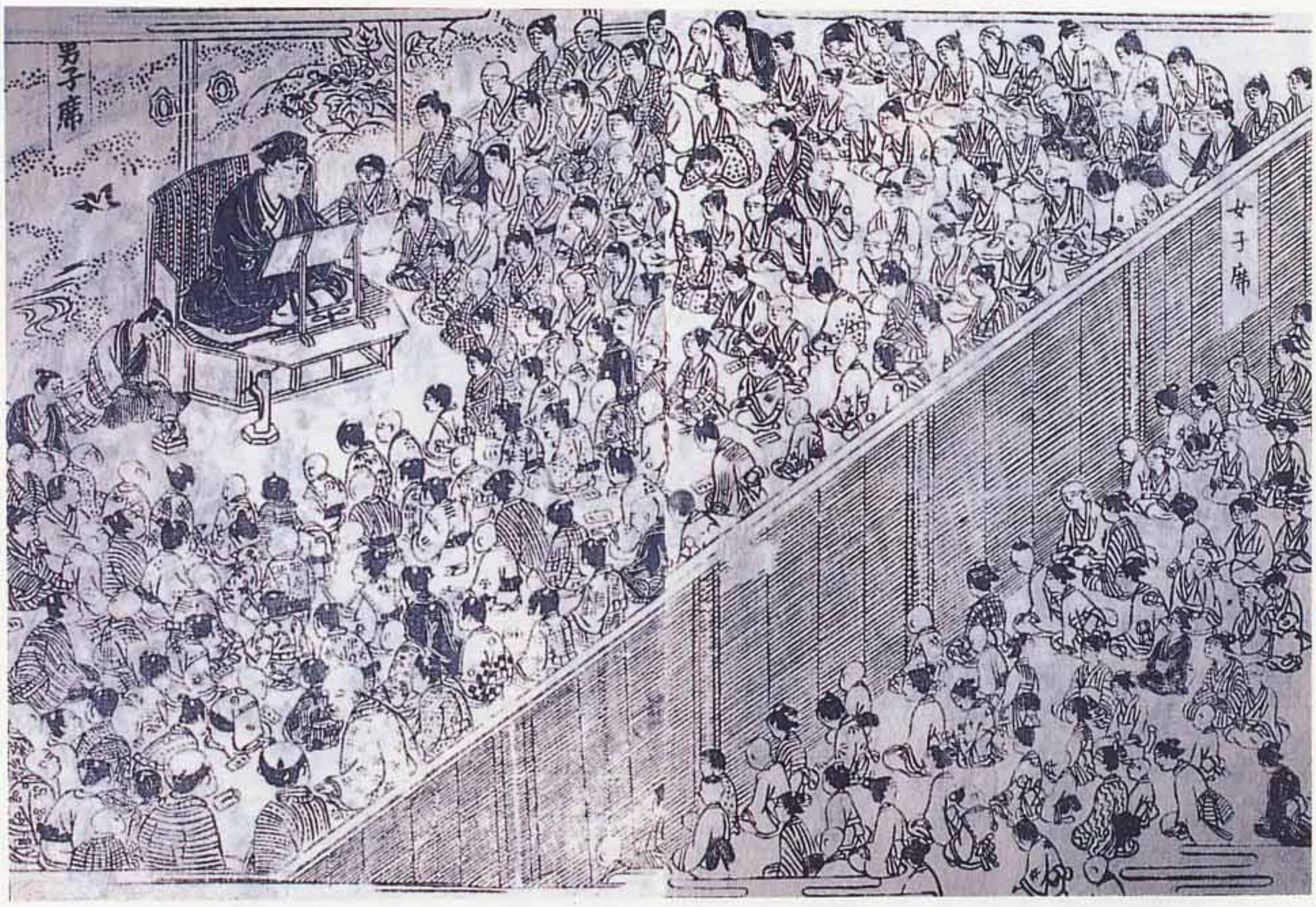
第６回展示

阿波の心学

―大久保家文書（美馬郡半田町）を中心に―

平成５年４月27日（火）～平成５年８月１日（日）



徳島県立文書館（もんじょかん）

近世の庶民教育

文字による支配と契約

一般的に学問が民衆の間で重視されるようになるのは江戸時代中期以後のことであります。

近世初頭、太閤検地によって日本全土が検地帳に記録されて以来年貢の多寡、夫役の人数などが文字によって書き残され、その文字記録（公文書）によって系統的継続的に年貢や夫役が民衆に課せられるようになりました。このように民衆支配の手段として文字が定着するのは江戸時代になってからのことであります。これは「文字による支配」の確立といえましょう。

また民間でも、金銭貸借・雇用契約などに「証文」がとり交わされるようになると、証文の一字一句が人々の運命を左右するような「証文による契約」の時代になったことを意味します。

寺子屋と私塾

こうした時代になると、支配者側も被支配者側も文字を習得することが必須条件となってきます。

支配者側では各藩において藩校が建設され、藩士の教育を積極的に行うようになりました。藩校では主として忠孝を中心にした朱子学（儒学）が「官学」として尊重されました。

民衆の側では商人や豪農層の子弟を中心に、寺子屋における庶民教育が普及してまいりました。寺子屋は阿波国内で四二二か所という明治の調査による統計が残っていますが、その実数はこれに数倍したと言われています。江戸時代には村数が五百以上ありましたから、一村に一つ以上の寺子屋があったと考えられます。

寺子屋で教育されたのは実用的な読み書きというごく初歩的な内容でしたので、これに満足しない生徒たちは比較的高度な学問を目指して各地にあった私塾に入りました。阿波国内の私塾数は三七か所、他に藩校の儒者等で塾を開いていたのが十数人おりました。生徒数は寺子屋と私塾とをあわせて合計約二万五千人でした。

商業肯定の心学

幕府の学校「昌平黌」で教える学問（官学）を「朱子学」に限定したのを受けて、全国各藩の藩校も朱子学を講ずるようになりました。朱子学は、親に対する子の「孝」を最大の美徳とする孔子の学問を、宋代の朱熹（朱子）が再構築したものであります。その特徴は君主に対する「忠」を最大の道徳とし、これに従うことを自然の理であると説いているところにあります。

これに対して儒学の他の各学派（陽明学・徂徠学・古学・折衷学等）でも、主旨に多少の違いはあっても「忠孝」を第一とし、台頭してきた商業を軽視する点では一致していました。

心学は、江戸時代中期に石田梅岩によって創始され、手島堵庵・中沢道二・上河淇水らによって発展の道をたどってきました。

儒学が商業未発達の時代に発生した学問として、商業に対応し切れなかったのに反し、「心学」は商業の持つ社会的役割を重視し、利潤追求の正当性を認めました。また商人階層と武士・農民・職人階層の人間的価値の平等をも主張しました。そして人間本来の「道」を発見・体得するためには、神道・仏教・儒教・道教など従来の宗教・道徳を実践することの必要性を論じています。

こうした通俗性と融通性が商人層を中心に支持され、全国で四十か国、百三十余か所に講舎が設置され、庶民の学問として一時期大流行しましたが、幕末を境に衰退しました。

『阿波の心学』展示に当たって

徳島県立文書館長　大和武生

徳島県立文書館では、企画展示としては公文書資料と古文書資料とを交互にとり上げてまいりました。今回は第六回企画展示として古文書展示「阿波の心学～大久保家文書を中心に」を企画いたしました。

「心学」は商業を肯定する庶民の学問であります。阿波は比較的早い時期から藍を中心に商業資本の発達した国でもあります。このため商人層の間では商業を否定的にとらえる武士の官学である儒学よりも「心学」が親しまれてまいりました。阿波では撫養の学半舎、徳島の性善舎、半田の根心舎など商業の栄えた地で講舎が建設され「心学」が講じられてまいりました。

今回の展示資料の出所である大久保家（敷地屋）は、元禄年間に弥三右衛門が吉野川南岸の広大な荒廃地を開墾して敷地屋の基礎を固めました。弥三右衛門には七人の子供がありましたが、長男だけに独占相続させず、それぞれに財産を分与しました。子供たちは、びんつけ・半田漆器・油・米穀・酒・雑貨等の販売、質屋などの家業に従事しています。その経営方針はそれぞれの家が独占しながら、密接に連係を保つという近代的な企業連合的商法を採用して約百年間、半田の経済界に君臨してまいりました。このため一族は「睦講」と称する親睦・経営のための連絡会議を定期的に開いております。

敷地屋代々の当主たちは、商業を肯定する「心学」を学び、半田根心舎の主要メンバーとして活躍するにとどまらず後世に貴重な心学関係資料を多く保存してきました。

今回の展示に当たり、得がたい資料を数多く提供していただきました大久保家を初め、脇町高等学校、半田町教育委員会などの関係者に対して心からのお礼を申し上げる次第であります。

表紙写真

【心学講義聴聞の図】

大久保家蔵の手島堵庵『前訓』安永二年（一七七三）刊の口絵より引用。

「心学」の祖、石田梅岩の弟子、手島堵庵は、成人のみを対象としていたそれまでの心学講話とは別に、子ども（七～十五歳）のみを対象とした『前訓』と称する訓話教育の講義をはじめ、その要旨を『前訓』として出版した。この図は、男・女別席で、講話を神妙に聞き入る大勢の子どもたちを描いている。児童の訓育に着目した点で、堵庵の『前訓』は教育史上高く評価されている。

【根心舎（こんしんしゃ）　夜驚（やけい）】　大久保家蔵文書

文化二年（一八〇五）ごろ、美馬郡半田村に「根心舎」という石門心学の講舎が開設され、徳島「尊性舎」（のち性善舎）、撫養の「学半舎」とならんで阿波藩における心学運動の中心地となった。「夜驚」は根心舎の活動記録である。主たる構成員は半田を中心とした木地師・仲買問屋・漆器関連産業等に従事する商人たちであった。

中沢道二

江戸中期心学隆盛期の人。京都西陣の機屋であったが手島堵庵に心学を学び、堵庵の命により安永八（一七九九）年江戸に行き「参前舎」を開いて、心学教化運動の中心とした。全国二十ヵ国余りを巡遊し、心学講舎二一舎を開いた。道二は梅岩の社会批判の面と堵庵の主観的な人生哲学の面を融合統一し、人間学に発展させた。このため心学は一般町人をはじめとして農民の間にも普及し、さらに大名・旗本その他にも広く浸透して行った。

著書『道二翁道話』

会友大旨

為学玉箒

道二翁道話

柴田鳩翁

江戸時代中期心学衰退期の人。京都の柴田鳩翁（一七八三～一八三九）は、手島堵庵の門弟に心学をまなび全国二十か国に遊説。失明にも負けずたくみな話術を駆使して、無学の庶民や子供から武家・公家に至るまで、その心を魅了し「道話の神様」の異名をとった。終生心学教化に専心し、天保大飢饉に際しては大規模な飢民救恤活動を実施した。

著書『鳩翁道話』

鳩翁道話（きゅうおうどうわ）

【参考文献および引用図書】
『半田町史』
『週刊朝日百科　日本の歴史　8～9巻』

石門心学の展開と大久保家所蔵心学図書

石田梅岩

「心学」創始者。町人の学問（庶民教学）として知られる心学は京都の商家の奉公人として生きた石田梅岩（一六八五～一七四四）によってはじめられた。梅岩は当時の商業軽視思想に対し、商いはいやしむべきものではなく、世に欠かせないものであると商業行為の正当性を主張した。そのため倹約・正直・勤勉・堪忍などを身につける必要があると説いて庶民の教化をはじめた。彼の講義を聞くため、男子だけでなく簾（すだれ）をへだてて女子も集まってきた。京都に普及した彼の教えは、多くの弟子たちによって「石門心学」と称され、京都・大坂はいうまでもなく、平易な道話によって庶民道徳として全国に普及していった。

著書『都鄙問答』『斉家論』

都鄙問答

都鄙問答

石門心学の概説書。全四巻。元文四（一七三九）刊。石田梅岩が心学の講授をはじめてから元文三（一七三九）に至る十年間の講義を整理・編集したもので、石門心学の立場と根本理念がわかりやすい問答形式で述べられている。

手島堵庵

江戸中期心学隆盛期の人。京都の富商であった手島堵庵（一七一八～八六）は、石田梅岩晩年の弟子。梅岩の教えを「心学」運動として組織し、広く普及させた。その拠点として「心学講舎」を、京都（五舎）、大坂（三舎）、江戸（三舎）の他、各地方に次々と設置した。また、心学修業及び教化のための定書の類を制定し、全国の講舎と心学者を、京都の「明倫舎」を頂点とした統制下においた。また、教化方法に工夫と改善をくわえ心学の平易化につとめた。彼の教えは自己反省に重点をおく精神修養の教えや生活哲学である。道話・道歌など教化方法も成人・婦人・子供のそれぞれに適した方法が考え出され、民衆に受け入れられやすくなった。

著書『坐談随所』『知心弁疑』『友会大旨』『前訓』『児女ねむりさまし』『為学玉箒』

前訓

知心弁疑

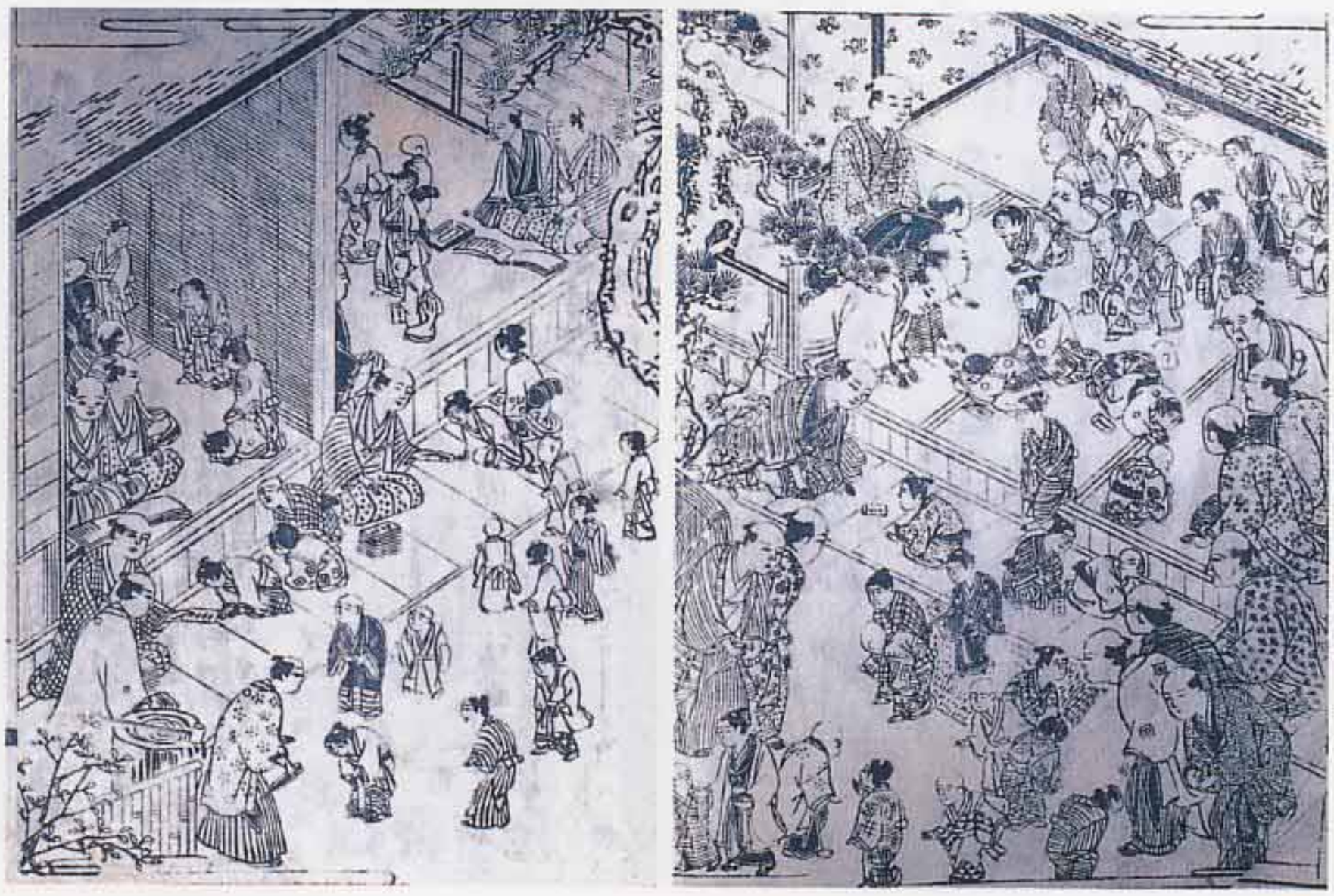
一七九三	寛政五年		
一七九四	寛政六年		
一七九五	寛政七年	中沢道二、	「道二翁道話」発刊する。
一七九六	寛政八年		
一七九七	寛政九年		
一八〇三	享和三年	中沢道二没す。	大島有隣、参前舎の舎主となる。
一八〇四	文化元年		
一八〇五	文化二年以降	大島有隣、	山陰・広島をまわり教化を行う。
一八一〇	文化七年		
一八一七	文化一四年	上河淇水没す。	
	文化末年		
一八二一	文政四年	柴田鳩翁が京都時習舎の門に入る。	
一八二五	文政五年	柴田鳩翁、	心学教化に専念することを決める。
	文政末年		
一八三五	天保六年	柴田鳩翁、	「鳩翁道話」発刊される。
一八三六	天保七年	大島有隣没す。	
一八三九	天保一〇年	柴田鳩翁没す。	
一八四七	弘化四年		
一八七一	明治四年		

阿波の動き

和歌山の上田唯今、初めて徳島・撫養で心学を講ずる。	
半田村の庄屋篠原長久郎、大阪で中井典信に初入する。	
撫養里見平兵衛、南方林喜十郎の両名半田村篠原家で講話を行う。	
徳島に尊性舎、撫養に学半舎が設立し、京都明倫舎に心学講舎として認められる。	
上田唯今、半田村へ入る。	
再び上田唯今に半田村へ入る。	
明倫舎三代舎主上河淇水阿波へ来講する。	
このころ、阿波の心学の隆盛期。	
貞光村出身の桑原冬夏、備中国出身の田村祐之進半田村へ来村し、講話を行う。	
半田村木ノ内に学舎ができる。後に根心舎と名づけられ講舎として認められる。	
このころ田村祐之進盛んに半田を訪れ、講話を行う。半田心学の隆盛期。	
半田根心舎の学舎が焼失する。	
徳島の尊性舎が性善舎と改名する。	
撫養学半舎廃絶する。	
半田根心舎廃絶する。	
徳島性善舎廃絶する。	

心学関係年表

年代	全国の動き
一七二九　享保一四年	石田梅岩、京都車屋町にて心学の講座を開く。
一七三九　元文四年	石田梅岩、「都鄙問答」を著す。
一七四四　延享元年	石田梅岩、「倹約斉家論」を著す。石田梅岩、没す。
一七六一　宝暦一一年	手島堵庵、家督を嫡男の和庵に譲り、心学の教化に専念し、心学の大成者の道を開く。
一七六五　明和二年	手島堵庵、京都に心学講舎五楽舎を作る。「会友大旨」を著す。
一七六八　明和五年	手島堵庵、「町人身体はしら立」発刊す。
一七七三　安永二年	手島堵庵、「前訓」「知心弁疑」発刊す。 このころ中沢道二が手島堵庵の門下となる。
一七七七　安永六年	手島堵庵、「町人身体なおし」を発刊す。
一七七九　安永八年	手島堵庵、心学講舎時習舎を設立する。中沢道二関東に下り心学の教化を開始する。
一七八〇　安永九年	手島堵庵、「子弟訓」を発刊す。
一七八二　天明二年	手島堵庵、心学講舎明倫舎を開設する。大島有隣が中沢道二の門にはいる。 このころから明倫舎を中心とした心学の統制始まる。また、心学講舎が各地に開設される。
一七八三　天明三年	中沢道二、江戸日本橋で心学講舎参前舎を設立する。
一七八六　天明六年	手島堵庵没す。寺島和庵明倫舎二代舎主となる。
一七八九　寛政元年	手島堵庵、「為学玉箒」発刊する。
一七九〇　寛政二年	中沢道二、江戸石川島人足寄場の講師となる。
一七九一　寛政三年	上河淇水、明倫舎三代舎主となり、心学講舎の統制につとめる。 このころ、日本各地に普及し四〇ヶ国で講舎八一ヶ所に達し、心学の全盛期を迎える。



手島堵庵「前訓」の絵より

心学では大人、女子、子どもなど年齢、立場に応じた教育を行った。右は子どもを対象とした場面である。

大久保家について

大久保（敷太）家は、敷地屋弥三右衛門の五男五郎兵衛に始まる。この敷太家について三代大久保熊三郎が作った「家誉記録」で追ってみよう。五郎兵衛は、明治六年（一七六九）の段階で敷地屋から分家をする。五郎兵衛の時代は、稲田九郎兵衛の頭入百姓として存在していた。

会所付言上格証書

五郎兵衛の兄弟は敷地屋・油屋・讃岐屋等の屋号を持つ商人であった。大久保家はそういった親戚筋で睦講（むつみこう）という組織を作って、強いつながりを持っていた。

大久保（敷太家）太兵衛は、享和元年（一八〇一）に五郎兵衛の死によって家督を嗣ぐ。このころの若い太兵衛は、心学に傾倒し、根心舎設立の中心人物だった。文化三年には塗物（漆器）の商売を始め敷地屋太兵衛（略して敷太）を名のり、文化六年には、村役人である五人組となる。大坂で商売が軌道に乗り始めた弟勝蔵、利兵衛とともに藩・稲田家の道普請や屋敷普請のための御用金などを調達していた。この功が認められ、文化七年には夫役を免除され、続いて文化九年には名字帯刀（名字は大久保）を認められている。更に文化十二年には造酒株及び諸道具を譲り受け、酒造業を始めているが、その五年後の文政三年まだ八才という幼い三代目熊三郎を残し亡くなっている。

熊三郎が成人し活躍し始めるのは、天保三年二十才稲田家の半田村取立役と成ってからである。熊三郎は、心学・国学・俳諧等の学問にも深い関心を寄せ、養気堂・一心などの号を持っていた。

一時体調を崩したこともあったようだが、天保七年には〆油株・質屋株を手に入れ油商・質商へと手を広げている。このころ、大坂の二代目伊丹屋（荘保）勝蔵とともに寄進や御用金の調達を進めている。大坂の伊丹屋は、この後も四代目・五代目と敷太家から養子を受け入れるなど深い関係を続けている。

質屋株証書

弘化二年には、稲田家の家来に取り立てられ、郷役所の支配を離れ、稲田家の猪尻会所付言上格という身分を得る。続いて嘉永二年には、稲田家の調達方勧論役という役職を与えられ、幕末という激動の時代を、稲田氏という筆頭家老の家来として、御用金の調達に走り回るようになっていく。熊三郎は激務の中、明治維新を見ぬまま、亡くなった。このとき嫡男の昌太郎は、二十七才と成人しており、すぐに家督を嗣いで、猪尻会所に出仕していた。

「家誉記録」の記述はここで終わっている。江戸時代後期から幕末期にかけて、商売の成功とともに、大久保（敷太家）の最も華やかな時期であった。

大久保（敷太）家系図

- 弥三右衛門（敷地屋中興の祖）
  - 幸兵衛（敷地屋・現小浜姓）……以下略
  - 利兵衛（敷地屋・現大久保姓）……以下略
  - 次左衛門（敷地屋・現真鍋姓）……以下略
  - 貞右兵衛（敷地屋・現大久保姓）…以下略
  - 五郎兵衛（稲田九郎兵衛頭入百姓・敷太家初代）
    - 次右衛門（油屋・現大久保姓）……以下略
    - 吉兵衛（讃岐屋・現大久保姓）……以下略
    - 猿之助（早世）
    - 太兵衛（敷地屋・大久保姓）名字帯刀御免
      - 熊三郎（敷地屋）
        - 恵吉（早世）
        - 徳島藩藍方御用 稲田家調達方
        - 昌太郎（敷地屋・半田村会議員）
        - 忠次郎（大阪住・四代荘保勝蔵）
      - 勝蔵（大阪住・伊丹屋・荘保姓）
        - 亀太郎（勝蔵）……以下略
    - 利兵衛（大阪住・伊丹屋）……以下略
      - 某（早世）
      - 太平（大阪住・荘保家大番頭）…以下略
      - 栄蔵（大阪住・五代荘保勝蔵）…以下略
      - 勇蔵…以下現大久保家
      - 昌次郎…以下略

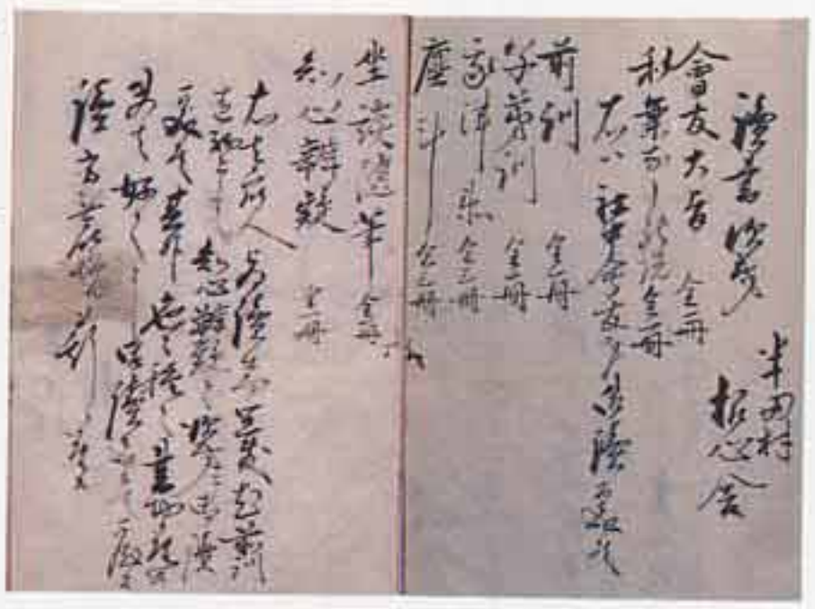
大久保家と心学（半田村根心舎の活動）

阿波での心学の興隆は、寛政五年（一七九三）和歌山の上田唯今（手島堵庵・上河淇水の高弟、和歌山において修敬舎の舎主として活躍）が徳島へ来て遊説をしたことに始まる。

大久保家文書の中に残っている『根心舎夜驚』は文化七年根心舎焼失以降に作られた資料で根心舎活動の覚え書きを記した文書と思われる。その中程に、半田村の心学の初期の状況が書かれている。それによれば、まず寛政五年春に半田村の庄屋篠原長久郎（蒼山）が大坂で中井典信（手島堵庵弟子）へ入門している。寛政六年三月には、撫養（鳴門）の里見平兵衛、南方の林喜十郎が篠原邸で心学の道話を行っている。更に寛政七年六月・八年六月と二度に渡って上田唯今が半田にまで来ているがそのときに心学へ入門したものは数十人に達していた。

根心舎夜驚

その後、文化元年四月に貞光村出身の桑原源兵衛（号は冬夏、大坂鎌田先生門人）がやってきたり、同九月備中の人田村祐之進（丹波伝習舎谷河物外高弟）が二十日にわたって逗留した。さらに田村はその後二、三、四年と毎年のように半田へ入り教化に勤めている。



根心舎読書の次第

文化二年二月には、根心舎という学舎が完成し京都の明倫舎（手島堵庵が全国の心学講舎の中心とした講舎）にも公認された。根心舎は、文化七年十月に焼け落ちてしまい、現在では、木ノ内（地名）という字の中にあったことしかわかっていないが、少なくとも四、五〇名の講員が居たようである。

大久保家の初代大久保太兵衛は、他の半田商人とは少し違った動きで心学へと近づいた。太兵衛の弟の勝蔵（伊丹屋）は、大阪で商人として大成功していた。そこで太兵衛は、大阪において、中沢道二（手島堵庵の高弟主に関東で心学を広めた功労者の門へ直接は入っている。）大阪の勝蔵はその後も心学を尊び、文政年間には、同志とともに協泰舎という講舎をつくり、家内や使用人にもその道を説いていた。

太兵衛時代の心学関係の資料は、根心舎と共舎焼失後、幕末期にかけて半田心学の中心人物の一人である。嘉永二年「大久保養気堂蔵書目録」によれば国学・儒学・医学書等と共に、二七種の心学関係図書を所蔵していたことがわかる。更に、自分自身でも、心学の講義を行ったのか、「朔望祝言弁」「見聞発明説」などの著作活動を示す史料も残っている。

朔望祝字弁

大久保家蔵書目録と蔵書印

に灰になったのか、数少ない。その子大久保熊三郎は早くから、心学に打ち込んだようで、関係史料も多数残っている。熊三郎は、根心

展示史料目録

	書　　名	年　　代	大きさ(cm)	備　　考
	壁面ケースA			
1	都鄙問答　巻之1～4	元文4年	27×18	脇町高校所蔵
2	倹約斉家論　巻之上下	延享元年	23×16	脇町高校所蔵
3	我津衛　巻之上中下	文政6年	22×16	脇町高校所蔵
4	前訓	安政2年	22×16	脇町高校所蔵
5	為学玉箒　全6冊	寛政元年	23×16	脇町高校所蔵
6	道ニ翁道話　全16冊	寛政7年	22×15	脇町高校所蔵
7	鳩翁道話　全5冊	天保6年	22×16	脇町高校所蔵
	壁面ケースB			
8	根心舎夜驚	文化7年	25×17	オオク 311
9	心学聞書控	文化13年	24×17	オオク 930
10	心学伝授善心之弁	近世	25×17	オオク 931
11	朔望祝言弁	近世	24×16	オオク 936
12	當家秘事一子相伝明倫記録	近世	24×16	オオク 943
13	養気堂蔵書目録	嘉永2年	35×13	半田町所蔵
	展示ケースA			
14	勝蔵様利兵衛様（先祖書）	近世	16×156	オオク　10
15	奉申上覚控（熊三郎身居の件）	天保8年	25×55	オオク　20
16	家誉記録	近世	24×17	オオク 763
	展示ケースB			
17	覚（質屋株聞届の件）	天保7年	25×33	オオク 174
18	覚（調達勧諭方被仰付の件）	嘉永2年	16×39	オオク 570
	展示ケースC			
19	窮理問答及自説雑書	天保6年	24×17	オオク　9
20	寺子教本	近世	25×18	オオク 917
	展示ケースD			
21	暦術運気天文図解　巻之1～5	元禄元年	23×16	オオク1004
22	天眼通器（銘天斗）	安政元年	18×18	オオク1327

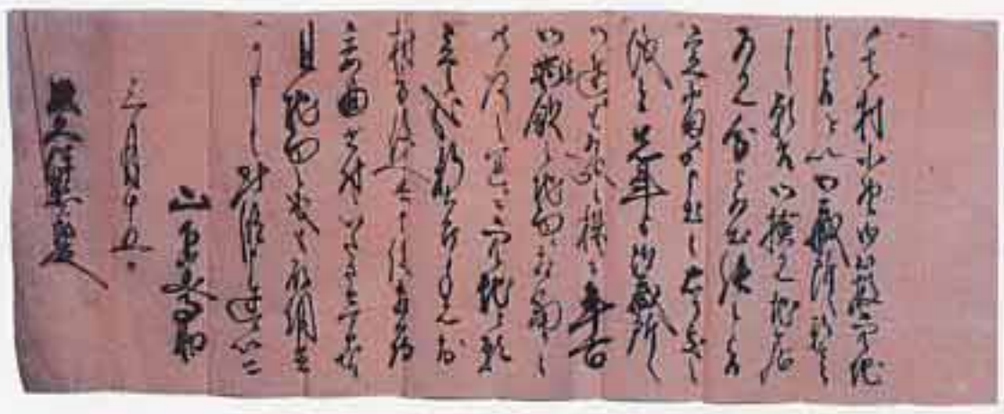
※会期中、一部展示替えをすることがあります。（備考の数字は請求記号）

※この展示にあたって、「朝日百科日本歴史第9巻」「岩波書店日本思想史大系石門心学」「半田町史」「阿波学会学術調査報告半田町」を参考にしました。

大久保家と稲田氏

猪尻侍は、元々、大坂の陣以前に稲田氏にしたがった家来たちでしたが、江戸時代中期以降はそうした家柄に加えて、稲田氏への献金による忠誠が重視され、後には資産のある有力農民・商人が猪尻侍となる道が開けました。太平の世の経済・流通の活発化は、収入を現物年貢に依存した稲田家の財政を苦しめ、逆に諸経営に成功した商人・農民の地位を高めました。有力商人・農民が猪尻侍にとりたてられるのは、こうした時代の流れにそったものでした。

『家誉記録』には、大久保家が百姓から猪尻侍に取り立てられた経緯が記されています。大久保家は農業と質屋・酒・油などを商っていましたが、家を隆盛させたのは分家の伊丹屋（荘保）勝蔵が大坂で商売を成功させた功績が、大きいようです。弘化二年（一八四五）には熊三郎と勝蔵父子の稲田氏への貢献がみとめられ、熊三郎は会所付言上格という猪尻侍のなかで高い地位についています。



半田村の薮地をめぐり殿様の蔵奉行と稲田家が対立

ただ、熊三郎はもろ手をあげて喜んだのではなく、子孫のために次の言葉を書き残しています。「子孫之者、相心得可申事。頭入百姓ニ而雖駆出会処附御家来ニ召出、御郡代処何の義は居百姓ニ而庄屋支配也」（子孫の者が心得ておくべきこと。稲田氏の知行地に住む百姓から猪尻会処附けの稲田氏家来に召し出されたけれども、藩の役人である郡代に対してはあくまで百姓で庄屋の支配をうけなさい）。つまり、熊三郎は稲田氏と藩の二系統の支配のうち、稲田氏の政務に関しては侍としてふるまうべきだが、藩の政務については庄屋支配下の一庄屋として行動するよう戒めたのでした。

稲田家支配の夫附御改下調帳

半田村にはあるときは武士、あるときは百姓としてふるまった猪尻侍が、何軒かあり、幕末・維新には「草莽の志士」として活躍しました。

現在の半田町域に相当する半田三か村（半田村・半田口山・半田奥山）の大部分は、筆頭家老稲田九郎兵衛の知行地でした。知行地とは、蜂須賀家の殿様が家臣たちに分け与えた領地をさし、半田は稲田家の領地であったと考えても

家誉記録

家誉記録

およそ間違いありません。ただ、年貢の取り立て、検地、人口調査などは稲田氏がおこなっていたのですが、商業の許認可や稲田氏行政の監察は藩の役人（郡代や蔵奉行など）が担当しており、半田三か村では稲田氏と藩の二系統の行政機構の下にあったといえます。そのため庄屋・村役人も、主に稲田氏の配下で業務にあたる者と、藩の配下でいる者に分かれる場合がありました。

大久保家では、三代目の熊三郎が稲田氏系村役人の「御取立」（稲田氏分の年貢の取り立て責任者）となっています。

稲田九郎兵衛は殿様につぐ藩内第二の地位にあったので、実に一万四千石余の知行地を支配し、江戸時代後期には約一万石を淡路に、四千石余りを阿波にもっていました。阿波の知行地は半田三か村のほか、板野・阿波・麻植・美馬・三好郡に点在しており、そのかなめとして美馬郡猪尻村（現在の脇町）に郷役所と会所という二つの役所をおいていました。

郷役所は稲田氏知行地の年貢の取り立てや用水の管理をつかさどる役所で、主に百姓などの被支配身分の人々を対象とした業務を行っていました。

会所は、稲田氏知行地に住む稲田氏の家来（「猪尻侍（いのしりさむらい）」と呼ばれた）を対象とした政務・儀礼を行っていました。

金のなる木

幹（根元より）しょうじ木（正直）
　じひふか木（慈悲深き）
　よろずよ程のよ木（万程のよき）
枝（右下より）油断のな木（油断の無き）
　辛抱つよ木（辛抱強き）
　いさぎよ木（潔き）
　あさお木（朝起き）
枝（左下より）家内むつまじ木（家内睦まじき）
　養生よ木（養生良き）
　ついへのな木（費の無き）
　かせぎ木（かせぎ）

出典　「心学御題控」巻五　天保九（一八三八）
（根心舎中・堺屋弥蔵）

「金（銀）のなる木」について

石門心学の始祖・石田梅岩は、京都の商家に二十数年奉公し、二世・手島堵庵（通称近江屋源右衛門）は京都の大商家の出身である。心学はきわめて平易でわかりやすく、日常の実践道徳を説いて多くの支持者を得たが、とりわけ商人の間に広く浸透した。梅岩いらい、正直・倹約・知足安分などが強調力説され、多くの心学継承者たちが、これらを日常生活上の道徳規範とする家訓や人生訓を好んで残している。

ここに描かれた「金のなる木」は、正直・慈悲心・知足安分を根幹となし、家内和睦・養生・倹約・勤勉・潔癖・堪忍・早起きなど、心学の説く平易な徳目を掲げている。私達はこの絵から、これらの道徳実践を通して、家職の繁栄と家内和合、ひいては子孫隆盛の願望を看取することができるのではないだろうか。

第6回展示　阿波の心学　—大久保家文書（美馬郡半田町）を中心に—

発　　行　平成5年4月27日
編集・発行　徳島県立文書館　〒770　徳島市八万町向寺山　TEL0886-68-3700
印 刷 者　㈱芳川堂印刷所　〒770　徳島市中通町1丁目　TEL0886-22-4915